

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和4年5月
第107号
毎月1日発行

ホームページ

きょうらの
覚悟はいつも
できなくて

マインドセット

先日、ある友人が「資産形成」の話をしてくれました。要は、株や投資などで将来の経済的な不安を少しでも解消しようという話です。

「だれかとお金の話をすることって、日本人には不道德というか、汚いというか、そういうイメージがあるよね」と前置きをしたあとで、彼は最初にこう言いました。

「まずはマインドセットが必要だよ」
初めて聞いた言葉だったので、なにやら洗脳されそうな気分になってしまいました。そんな私の不安を見通してからか、続けて説明してくれました。

○株などで大きなもうけをしようと思わないこと。
○「収入」の前に「無駄な支出の点検」をすることが大切。

○これらの話を、今の高校生はすでに授業で勉強をしているということ。
つまり、「マインドセット」とは「今の自分の考えの根本を見直す」というものでした。

仏教マインドセット！

後で私は「もしかしたら、マインドセットは、生き方にも通じていないか」と思い始めました。

例えば、「犬の散歩をする」と、「犬と散歩をする」では、その歩き方にずいぶん違いが出てきそうな気がします。

他にも、「手に入れたら幸せになれそんなもの」かと思いきや、手に入れたらかえって苦しみのタネになっていたこと。避けて通りたい事や、さして興味関心の無かつた事から、自分の根本を揺るがすような出会いがあること…。

「引き算」でラクになれるのに、必死で「足し算」をしてしまうようなものですね。こんなミスの尽きない私たちに対して、

仏教は二五〇〇年前に答えを出してくださっております。それでも、その答えを聞く前に、最初に少々の「仏教マインドセット」が求められます。どうぞお寺へ遊びにいらしてください。(誰もチエックテストは致しません)(住職)

【できる！自宅葬・寺葬】

「本堂での葬儀を家族に相談したら、みんなに反対されました」。

寺の考えに賛同してくださったご当主と、当日の負担を少しでも減らしたいご家族のどちらにも、申し訳なく思いました。具体的にどんな風にして出来るのか、負担はどれだけ抑えられているのか。いずれにしても「やつて良かった」を実現するために、急いで準備いたします！
皆さまが安心できる空間、悲喜こもごもを受け入れる場所を作ってまいります。

ちよっと あたまの こりほぐし
あらゆる生きものの中で
カエルだけは、どんなことがあっても
落ち込みません。なぜでしょう。
こたえは裏面でーす



おてらより

「無縁墓改葬」の手続きします

境内地にある、長年お参りされていない墓地の整理をします。

- ①官報(国の新聞)に掲載(1年)
- ②官報掲載文を山門付近に設置
- ③該当墓地に「プレート」設置
- ④使用者不在の墓を撤去(3年後位)

本来は1年後に整理できるようですが、該当墓地に縁のある方を訪ね当てるのに時間を有することが予想されます。

お寺も完璧に把握していません。情報提供など皆様のご協力をお願いします。
☆この事業と同時期に
「墓をまとめる」
「墓じまい」「移設」を

ご検討の方は、お寺まで
ご相談くださいませ。



“やる気”に火を点じたもの

東井 義雄

大阪のある小学校で、三年生の子どもたちを相手に、作文の授業をさせてもらう機会がありました。ちょうどその日が「父の日」でもありましたので、私は、子どもたちに「お父さん」の作文を書いてもらおうと考えました。それで、「みなさん、目を閉じてお父さんのことを考えてみてほしいんだ。どんなお父さんの姿が目に見えてくるかね？」と言ったのです。すると、やんちゃそうな一人の男の子が「週刊誌もって……テレビの前で寝ころんで……お母ちゃんに叱られているところが浮かんでくる」というものですから、「ぼくもそうや」「ぼくもそうや」と、大さわぎになりました。

昔の子どもは家族みんなで一緒に働きましたので、お父さんのご苦労がよくわかったのですが、今は働きの在り方が変わり、お父さんの真剣に生きる姿を見ることが出来なくなっているようです。これは、子どもたちにとって不幸なことだと思います。

S君のお父さんは、会社の警備員さんでした。週三日は、夜通し徹夜で会社の警備にあたります。残りの日は、昼間、門衛もんえいで警備にあたるのです。

S君は、お父さんのそういう仕事ははずかしいと思っていました。だから友だちがお父さんのことを話すときでも口をつぐんでしまうS君でした。

ところが、お母さんが偉い方でした。ほんとうのお父さんに触れさせるため、吹雪の夜、徹夜で会社の警備にあたられるお父さんのために、温かい弁当を届けるように言いつけました。

S君が会社に着いたとき、吹雪の中、電灯をともして見まわりから帰ってこられるお父さんとぼったり会ったのです。「お父さん、たいへんだな」と、目が覚めた気がしたといいます。

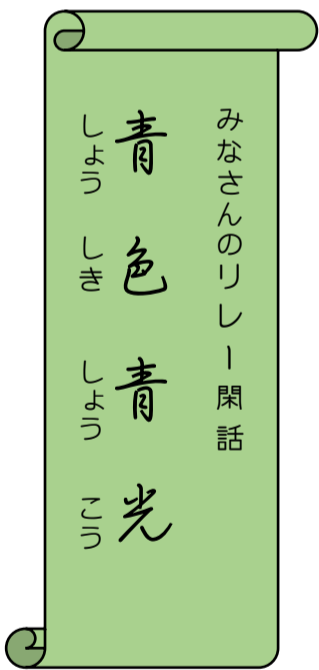
それからのS君は、弁当運びの役目を進んで引き受け、勉強の用意をして家を出るようになりしました。そして、門衛のお父さんの机で勉強をするようになりました。「自由貿易と保護貿易」「白人問題・黒人問題」……どんな質問にもピタリ急所をついた答えをしてくださるお父さんでした。それに、一緒に勉強していても、見まわりの時刻がくると、「遅うならんように帰って寝ろよ」とあたたかいねぎらいのことばを残し、あかりを灯して見まわりに出て行かれるお父さんでした。誰が監督しているわけでもないのに、お父さんって、責任感が強いんだな、と、お父さんの偉さに目を見張るようになりました。

ある晩もそうやって勉強して帰っていったとき「あんた、二時間もこの寒いのに何しとったの?」「お父さんと勉強しとったんや」「まあ、あんな寒いところで、身体も冷えてしまったやろ、早くこたつにあたりなさい、お母さんすぐミルクをぬくめてあげるから」とお母さんにいわれたとき、「いいや、ぼく、まだ勉強の続きが残ってるんや」と、S君は机に向かうのでした。

その時のことをS君は「吹雪の中を見まわりに出かけていった父のことを思うと、寒さなんかなんともなかった。父に負けてはならんと思つて僕は勉強を続けた」と日記に書いています。

お母さんの配慮によって、お父さんのきびしい生きざまが、S君に火を点じたのです。

『仏さまとお母さん』昭和54年



看護師として勤めてさせていただいて28年。18年前からは精神科一筋で今に至ります。

お相手の方やご家族が、少しずつ安心して生活できるようになることが嬉しく、また、自分も一緒に体験して気づかせていただいたり、互いに物事の見方が変わって視野が広がるような

感覚が新鮮で、気づけばここまで来させていたという感じですが。

その一方で、年々体験を積み重ねるほどに、自分の愚かさや未熟さを痛感するようになりました。わかったつもりの方がいて安易に言葉を発していたといえますか、その重みを感じるようになる、戸惑う自分がいるようになりました。

そして、50歳を過ぎると体力も落ちて病を患い、先日は2回目の手術を受けました。

長年の無理が重なってしまった、自分の健康管理できないなんてと気持ち沈む一方で、これで少しは真から対話できるようになれるかな、と安堵あんどする自分もいます。

病という体験は、私にとって辛い面だけではなく、自分を通して他者を思いやる機会へと導いてくれているようにも感じています。

体験しないとわからない、わかるうとしないところが自分の未熟さであり、愚かさでもありますが。。。

こうして日々を過ごさせていただけること、また気づかせてもらっていることに感謝を忘れない人間でありたいと思います。(N様より)

